

旧約聖書と日本の教会

西 満

TCUの図書館に「中央神学校の回想—日本プロテスタント史の一史料として—」¹⁰という一冊の古い本がある。中央神学校というのはあまり聞かれない神学校であるが、それもそのはず、1927年(昭和2年)に米国南長老教会系の神戸神学校と米国北長老教会系の大阪神学院が合併して開校し、1942年(昭和17年)太平洋戦争が始まった翌年に閉校になっているからである。中央神学校自体はたった15年間存在しただけであるが、その前身の二つの神学校を合わせると、1906年から1942年の間に277名の卒業生を世に送りだしている。その卒業生の中には著名な人物が何人もいる。まず日本だけではなく、外国においてもよく知られている賀川豊彦、初代日本基督教団統理として日本の教会や韓国の教会に神社参拝を強いた悪名高い富田満、戦後39の教会をもって日本基督教団を離脱して日本基督教会を設立した今村好太郎、同じく戦後、神戸改革派神学校の発足に関係した岡田稔、後に神戸改革派神学校の教授となった田中剛二等。

この中央神学校の旧約学の教授に、ゴードン・K・チャップマンという人がいた。チャップマンはこの「中央神学校の回想」の中で次のように記している。

私は以前から日本の教会で旧約聖書が余り用いられていないことに多大の関心をよせていました。ジョン・マカイ博士のアジア教会における旧約聖書の使用についてなる論文を読んで、更に本問題への関心を刺激されたのであります。この調査によると、朝鮮の教会は例外であるけれども、アジアの教会は、聖書の関心という点からいうと、新約聖書の教会であって、アジアの教会は旧約聖書を多く用いていない、と結論しております。旧約聖書は異教的環境の真只中で生活していた神の民と彼らにかかわる誘惑の問題を取り扱っています。この旧約聖書を等閑視することが、多くのアジアの教会が比較的信仰の上で弱い主な理由の一つと考えられています。そこで私は日本の教

会の説教及び聖書研究で旧約聖書がどの程度用いられているか日本全国にわたる数百の牧師に質問書を送りました。多くの回答が寄せられました。それらによると詩篇が例外的によく使われている以外、旧約聖書が説教や聖書研究で用いられることはきわめて少ないことが明瞭になったのでありまして、彼らの説教や聖書研究は主として新約聖書に基づいてなされました⁹⁾。

こういった後でチャプマンは、

戦争の影が色濃くなり、事態が益々険悪になるに従い、日本のキリスト教徒は国家神道との問題でおおいに悩みました。ことに、多くの偶像崇拜的習慣が宗教的意義をもたないという政府の主張のはざままで彼らの苦悩は倍加いたしました。キリスト教徒の間に混乱をおこした主な理由の一つは、教会はもちろんキリスト教主義学校においても、旧約聖書の知識を明らかに欠いていたことでありました。旧約聖書には偶像崇拜の性質とそれからくる不幸な結果が明瞭に描写されています。又、この偶像との問題で民が妥協しますと、神は直ちに審判をもって臨み給うことが明らかにされています。この混乱の悲しい状態が今も尚存続していることは、教団がなした戦争責任の告白に、国家神道の祭式とキリスト教徒が妥協をした悪にふれていない事実、このことがこれを証明しています¹⁰⁾。

1995年は、戦後50年ということで、日本人自身が国家の戦争責任について多に考えた年であった。教会自体も、戦争中の罪責問題について多に論じた年であった。戦後50年たって始めて教会はこの問題に大きく関わりをもった。しかし、戦争が終わって50年たって改めてこのような問題が大きく論じられる遙か前に、一人の在日アメリカ人の旧約学者が、このような鋭い指摘をすでにされていたことに、筆者は旧約を学ぶ者として多に考えさせられた。チャプマンによれば、その時点で、日本の教会が、自分たちやまた、同僚、先輩たちがなした戦時中の罪責についての告白をしていないことは、日本の教会が旧約聖書をあまり用いていないからだとして断じているのである！旧約聖書をないがしろにすることが、これほど大きな意味をもってくるということを、私たちは考えたことがあるだろうか。

旧約聖書の軽視ということ自体は必ずしも、アジアの教会だけに起きている事柄ではない。アメリカの聖書考古学者G・E・ライトは『歴史に働く神』の中でこう述べている。

現代のキリスト教会の大部分が、旧約聖書を、神、人間の性質と人間社会におけるその制度、世界歴史における神の目的などについての主要な啓示として、真剣に取り上げることをしなくなったことである。旧約聖書の学問的な研究は新約聖書のそれと引き離され、また、教会の告知にそれをつなぎ止めることから引き離されてしまった。前世紀の終わりごろまでに、キリスト教の旧約学者たちは、教会とその伝統的前提以上に、一般の歴史やオリエント研究、ないしは比較宗教学、宗教史の分野により多くの関心を持つようになり……その結果は、教会内のむしろ生き生きとした信仰の持ち主には、旧約聖書のまじめな研究などはむだなことであり、現代の生命的な関心事にかかわりのないぜいたくと感ぜられるようになった⁴⁾。

このように論じた後、ライトは、現代の教会にはマルキオン主義の広範囲な復活があり、テルトゥリアヌスのような教父たちが、マルキオンに対してなしたような議論の多くが再び用いられる必要があると主張している。

初代教会

初代教会においては、新約聖書の著者たちを始め、その時代の説教者たちにとって、旧約聖書は彼らにとって唯一無二のテキストであった。ペテロも、パウロも、ピリボもそして、その他多くの無名の説教者、伝道者も旧約聖書をテキストにして福音的な説教をし、イエスは救い主であると宣教をした。彼らが確信したことは、旧約聖書の約束はキリストにおいて成就されたのであるということであった。

たとえば、ペンテコステの日、聖霊に満たされたペテロは、ヨエル書、詩篇からみことばを引用して説教をなした。とくに彼が詩篇16篇を引用して主イエスの復活がそこに預言されていると語ったことは、詩編16篇を聖霊に導かれての新しい解釈をであった。従来のユダヤ人はそのようには解釈してこなかった。ミドラシュ・テヒリムでは、特に、6－9節を、次のように解釈している。

わが栄えは主なるメシヤを喜ぶ。彼は私を起き上がらせてくれる……情け

深い人間はゲヘナのにおいをかぐことはない⁶⁾。

このように、ここでは、主を信じる義人の救い、復活が記されているというのがユダヤ人の一般的な解釈であった。これに対してペテロを始めとする初代のクリスチャンたちは、旧約聖書はキリストを指し示していると解釈し、それが正しい解釈であると確信した。このように、初代のキリスト教徒は旧約聖書の思想に生き、かつ呼吸し、そこから説教をした⁶⁾。

続く続使徒教父たちも原則的には同じ立場に立った。しかしこの時代になると新約聖書が用いられ、やがて正典化されていったので、彼らはそれを説教のテキストに用いることができ、状況はずいぶんと違ったものになっていった。とはいえ、続使徒教父たちも、旧約聖書に全面的に依存し、それを絶対の権威として認めていた。「聖書」と記されていたり、「次のように記されている」ということばで始まる引用句は、旧約聖書を意味した。彼らは、旧約聖書は、「過去、現在、未来の啓示」であると信じた。

初代教会の時代から、旧約聖書を間違っ用いた人たちがいなかったわけではない。

その第一のものは、ユダヤ主義キリスト者とか、律法主義キリスト者とかいわれるグループである。それは、旧約聖書の教えをイエス・キリストの福音と同等か、それ以上の基準とみるものである。人は、イエスの十字架を信じるだけでは救われない。信仰の上にさらに、律法にしたがって割礼を受け、安息日を守り、ユダヤ教と同じ教えを守らなければならないというものである。このようなセクトについては、使徒の働き15章やガラテヤ書で言及されている。

旧約聖書を誤って用いたり、解釈したりするセクトは、さまざまに姿を変えて現代にも生きている。セブンスデイ・アドベンチストはその一つの形であり、また、エホバの証人もまたその一つの形態ではないか。その中でも最も悪魔的に悪用しているのは統一協会である。これはキリスト教とは似ても似付かぬ悪魔的なセクトである。

第二の間違った教えはその正反対のもの、すなわち旧約聖書は必要でないというものである。この考えはすでに初代教会に芽を出しているが、はっきりとした形をとったのは二世紀のマルキオンという人物においてである。マルキオ

ンは、グノーシス主義の影響を受け、神は「二人」存在すると考えた。創造者なる神（デミウルゴス）と贖罪者なる神である。旧約の神は、世界の創造者であり、義の神であって、その民イスラエルだけを顧みるが、厳しい義を持って支配し、律法をもって民を酷使する。時満ちて、神の長子である御子が来て、私たちが真の知識（グノーシス）に救いあげてくださり、悪の原理から解放してくださいと主張した。それが新約のイエス・キリストである。新約の神は愛（アガペー）の神で、旧約の神は必要ではない。旧約と新約は絶対的に対立するものである。マルキオンは144年にローマ教会によって異端として破門された。

殉教者ユスティヌスは、マルキオンをその時代の最も恐るべき異端者であるとみなした。マルキオンが当時の教会からいかに忌み嫌われていたかということが、ローマにおいてマルキオンと会見したスミルナのポリカルプスの言葉の中に見事に表現されている。「あなたは私をご存知ですか」とマルキオンは尋ねた。「知っています。あなたがサタンの初子であるということをして！」⁷⁾

テルトウリアヌスは、マルキオンに反駁する書を5巻記し（207年頃）、彼の異端性を徹底的に論じた。

中世のローマ・カトリック教会では、旧約聖書は、初代や古代の教会におけるほどは重要や役割を果たさなかった。原理的には、聖書は最高の権威を持つものであったが、現実には、そのような機能を果たさなかった。その第一の理由は、外典を第二正典として旧約聖書の中に入れて用いるようになったこと、第二の理由は、教会の伝承を権威あるものとして受け入れ、それによって聖書の権威を低めてしまったことによる。

宗教改革者

マルチン・ルター（1483－1546）

膨大な伝承によって聖書の権威を低め、また外典を正典の中に導入することによって、旧約聖書の主張を弱めてしまった中世のカトリシズムに対して、宗教改革者たちは、聖書を本来のあるべき地位に戻すことに努力した。ルターはヤコブ書を藁の書簡と呼び、エステル書が旧約の正典から除かれることを願ったと言われるが、他方、正典は66巻であることを強く主張したし、旧新約聖書

の無誤性、十全性を確信していた。ルターは32年間にわたって行なわれた彼の講義のうち、28年を旧約聖書に捧げたといわれる。

ルターは旧約聖書のうちにキリストに対する証しを見出そうとした。ルターは詩篇の中にキリストの死と、復活と、来るべき御国の映像を見ることが出来ると言った。祭司制と祭儀の型のなかにも、イスラエル民族の体験のなかにも、古い契約のなかで、キリストのみわざが宣教されていると考えた。大祭司、犠牲、天幕はみな、キリストを指す象徴である。ルターの神学はキリストの十字架の神学でもあった⁶⁾。

旧新約聖書に関するルターの考えを一口で言うならば、それは「律法と福音」と表現することができる。「モーセ五書」序文で、ルターは旧約聖書を「律法の書」と呼び、新約聖書を「恵みの書」と呼んでいる。しかしまた、彼はすぐさまつけ加えて、旧約聖書は恵みの宣言を含み、新約聖書は多くのおきてを含んでいるとも言う。

聖書は律法と福音、すなわち、神の審判と神の恵みという二重のわざを啓示している。聖書はキリストを宣教し、証しするものである。であるから、律法の中にも福音は隠された形でいつも存在するのである。これがルターの主張であった⁶⁾。

ジャン・カルヴァン (1509-64)

カルヴァンは、ルターよりももっと強力に、旧約の民イスラエルと新約の教会との連続性、同一性を論じた。カルヴァンは、旧約と新約の契約は実質において何一つ相違せず、全く一つのものであり、ただ「処理法」(administration)だけが違うのであるという。

カルヴァンは次ぎの三つの点を主張した。

1) 旧約のユダヤ人は不滅の生命の希望にとり入れられたのである。

2) ユダヤ人が主なる神に結び合わされた契約は、彼等の功績によるものでなく、彼らを召した神の憐れみによるものである。

3) 彼らは究極的には仲保者としてキリストを持っており、また知っていた。この仲保者によって彼らは神と結びつき、神の約束にあずかるものとされた。

これら三つの主張を論証するために、カルヴァンは『綱要』第二編10章で23項にわたって論じている⁶⁰⁾。さらに11章では旧約と新約との相違について論じ

ている。その相違点とは次のようなものである。

1) 神は旧約の民に天上の嗣業（永遠のいのち）へと目を向けさせるにあたって、まず、地上的な恵みのもとにそれを味わせ、教えた。しかし新約においては、イエスの福音によって、来るべき生の恩恵（永遠のいのち）はもっとはっきり、分かりやすく啓示された。

2) 旧約は実質を持たないで、単にものを型や影で示すだけであった。それに対して、新約は実質と確固たる具体性を開示する。たとえば、旧約の祭司職と祭儀は、キリストとその贖罪を表しているのである。

3) 旧約（律法）が「文字的」であるのに対し、新約（福音）は「霊的」である。

4) 旧約は「奴隷的」である。なぜなら心のうちに恐怖を起こさせるからである。それに対して、新約は「自由」なものと呼ばれる。なぜなら、御霊は信頼と確信にまで心を高めるからである。（ローマ8：15）。

5) 旧約は一民族だけに恩寵の契約が局限されていたのに対して、新約においては、仲保者イエス・キリストの贖いの契約が、すべての民族に拡張されることになった。

ユニオン神学校のエミール・G・クレーリングは、『宗教改革以降の旧約聖書』という書の中で、ルター派と改革派教会の旧約聖書観の相違を、別の面から次のように記している。

ルターは個人の救いの確信に関心を持ったが、改革派の神学者たちは、その救いの確信からでてくるキリスト者の生活に強調点を置いた。彼らはキリスト者の養育に適した社会的、政治的環境を造りだすことを重んじた。キリスト教国家は、キリスト教の原理によって運営されなければならないということこそ、彼らの目標であり、彼らはそのために多大な努力を払ったのである。しかし、新約聖書は彼等が願うような教会行政、政治行政の面における十分な用例を提供してはくれない。それは、初代のキリスト者はその社会にあって少数者であったからである。そこで、彼らは自分たちが目論んだような基盤によって運営された社会を見出すために旧約聖書を読むことになった。

それゆえに、改革派教会の指導者たちは、古い正典の権威に強調点を置くことに興味を覚えたのである⁽¹¹⁾。

旧約聖書が英米の社会に与えたもの

クレーリングはさらに、「キリスト教世界で、英国ほど、旧約聖書があたたく迎え入れられ、人々の生活の奥深くまで浸透したところはない」という⁽¹²⁾。そして、このことは特に、1550年以後、国教会がカルヴィニズムの影響を受けた以後、顕著に見られることである。とりわけ、英国の清教徒、長老派、分離派など、国教に強く反対した人々についていうことができる。彼らは国王や国の祭司を弾劾する預言者たちのことを記した旧約聖書を彼らの戦いの武器とした。

旧約聖書の思想は、イギリスからアメリカに渡ったピューリタンなどによって米国のキリスト教に大きな影響を与えた。彼らは新しい町造り、国造りに旧約聖書の思想を多分に用いた。

このように旧約聖書の思想は、欧米の社会に大きな影響を与えたが、同時に、アーネスト・ライトは西欧のキリスト教会も、近年旧約聖書離れをなしていると言った。ではなぜ、西洋の教会で旧約聖書離れが起きたのだろうか。

第一に、シュラエルマッヘル (1768-1834) やアドルフ・ハルナック (1851-1930) のような思想家の影響によるものである。マルキオン以来、キリスト教会で旧約聖書の権威について最も強く反対したのはシュライエルマッヘルであった。シュライエルマッヘルは、旧約と新約の間には神学的に何の関係もない。したがって、旧新約の位置を逆にし、旧約聖書を聖書の付録として、新約聖書の後におくべきであるとした⁽¹³⁾。さらに時を同じくして、ベルリン大学の教授ハルナックは次のように述べている。「2世紀においては旧約聖書を拒否することは間違いであったし、教会は正しくもこの思想を拒否した。16世紀において、宗教改革者たちがこのことから離脱できず、これを保持したことは運命的なことであった。しかし、19世紀も後にまだ旧約聖書をプロテスタント教会が正典中に保有するのは、宗教的教會的麻痺の結果である」⁽¹⁴⁾。

第二に、聖書批評学、特に、高等批評学の影響によるものである。特に、モ

一七五書批評学は旧約聖書の研究の上に広範囲な影響を与えた。しかし、今はそのことについて深く論じる時間がない。

第三に、第一次大戦の後に台頭したドイツのナチの反セム主義の攻撃である。ルーデンドルフはこう主張した。「旧約聖書はユダヤ人による作り話であり、それはキリストの時代よりも300年も後に記されたものである。」このようにヒットラーの御用学者たちは、旧約聖書を彼らの正典から除外することを主張した。今から考えると馬鹿げたようなことであるがしかし、僅かな期間とはいえドイツの教会の多くが、このナチの思想の影響を受けて悲惨なユダヤ人虐殺を許すことになったことは記憶すべきことである。間違った民族主義が恐るべき結果をもたらした。

しかし、このような中で、ヒットラーの暴虐な支配に抵抗して、「告白教会」という組織を結集し、反ナチスの活動をしたボンフェッファーは、旧約聖書を愛読したといわれる。彼は「旧約と新約から成る聖書は、教会の教えの唯一の源であり、基準である」と明言した⁽⁴⁵⁾。また、ボンフェッファーが獄中で友人に宛てて書いた手紙の中で、「私は自分がどれほど旧約聖書的に考えたり感じたりしているかという事に気付く事が一層多くなった」と記している。

西欧の教会において旧約聖書離れがなされたとはいえ、前述したように、伝統的に旧約聖書の思想が染み込んでいる。旧約聖書を専門とする学者や教師も大ぜいおり、また、旧約聖書から説教する牧師も沢山いる。しかし戦前の日本の教会では、旧約聖書の思想が重要視されることはごく一部の人たちを除いては殆どいなかったのではないだろうか。

なぜ戦前の日本の教会は旧約聖書を真剣に読み、用いなかったのだろうか。

第一は明治時代における国家主義政策の強化にある。1873年キリシタン禁制の高札が撤去された。1885年頃から始まったいわゆる鹿鳴館時代（皮相的欧化時代）はたった数年で終わりを告げ、1889年の帝国憲法の発布、翌90年の教育勅語の渙発によって、日本の国家主義、皇国史観が次第に国民の間に浸透していった。1912年、政府の呼びかけに応じて、神、仏、基の代表71名が一堂に会し、次のような決議をした。

1. 我らは各其の教義を發揮し、皇運を扶翼し、国民道德の振興を図らんことを期す。

2. 我らは当局者が宗教を尊重し、政治宗教及び教育の間を融和し、国運の伸長に資せられんことを望む。

明治末期のキリスト教は、国家主義に屈従順応し、神道イデオロギーによる国民精神の涵養に奉仕する御用機関と化していった。

皇国史観と聖書の神観、世界観、人間観、歴史観とは全く相いれないものがある。そしてこの国家主義、民族主義が日本のクリスチャンをして旧約聖書に深く立ち向かわせることを妨げたのではないだろうか。ドイツにおいて起るよりも30年以上前にこのことが日本において起ったのである。

第二は、聖書批評学、自由神学の影響である。1885年から87年（明治18年—20年）にかけてドイツのチュービンゲン学派の立場をとる宣教師が相次いで来日し、自由主義的なキリスト教を伝え、聖書の福音的理解を嘲笑した。日本にキリスト教が十分に根付く前にこのことなされたことは、日本のキリスト教会にとって全く不幸なことであった。自由主義神学は、新旧約聖書の両方の解釈に影響を及ぼしたが、特に、旧約聖書の解釈に多大な影響を与えた。日本の教会にあって自由主義は二つの流れに分かれた。一つは国家主義と結びついて、日本的キリスト教の流れとなった。海老名弾正はエホバ（ヤハウエ）の神は神道の天御中主神アメノミナカノヌシノカミと同じであると主張した。この神はいざなぎ、いざなみの命の神よりずっと前にあった神の名である。自由主義のもう一つの流れは社会主義と結びつき、キリスト教社会主義の流れとして発展した。明治、大正、昭和にかけて日本の教会はいくつかの流れが生じてきたが、しかし、多くの場合、政府や軍部の圧力に屈して日本的なキリスト教への妥協を余儀なくされた。旧新約聖書を一貫とした思想体系を作り上げることが作り上げることができたのは内村鑑三を始めとする極く少数の人たちであった。

後に日本基督教団の統理になった富田満は、1936年(昭和11年)明治学院において次のように講演した。

日本精神とキリスト教の神髄は共に神の観念に発している。すなわち日本精神はその根本に遡るならば、日本書記の中に神を本体として忠君愛国の主義を基としている。またキリスト教においても聖書の巻頭に「元始に神天地を造りたまえり」とあり、人格的神中心の宇宙観に発し、無言の裡に相通するものがある。しかるが故に諸君はその根本に立ち返り、両者の真義を把握

して、日本精神すなわち精神国日本建設のためにキリスト教徒として十分に貢献すべきである⁶⁶⁾。

さらに、1938年には、明治学院はキリスト教教育の基本を規定する寄付行為を「本法人の目的は教育に関する勅語の趣旨を奉戴し、キリスト教主義の教育を施すため」(第二条)とまで書き換えた。

聖書批評学が及ぼした影響について、渡辺善太は「聖書の説教とは？」の中で次のように述べている。

しかし何といても、歴史的批評的研究の結果、旧約聖書のいろいろな部分の歴史的信憑性が否定されている場合が、非常に多いということは、説教者をして、大きな困難を感じさせるようになった。たとえば自分が感動し、それから説教して選んだテキストが、注釈書を読んでみると、「後人による添加」なりとせられているを発見すれば、それから説教することができなくなるということは何となくめずらしいことではない。

これに対して韓国の多くのクリスチャンたちは、旧新約聖書66巻をすべて神の靈感を受けたものとして受け止め、それを神からの御言葉として実行した。迫害を受け、命の危険を冒してもなお、聖書の御言葉を守り、旧約聖書に示されているように、日本の官憲が要求する偶像礼拝を拒んだ。その結果10校のキリスト教主義の学校が廃校となり、2000人の信徒が逮捕され、200の教会が閉鎖され、500人余の指導者が獄死した⁶⁷⁾。このように迫害を受け、生命に危険をかけても聖書のみことばを守り通したのである。そこに、韓国の教会と日本の教会の相違があるように思う。

このような自由主義に毒された聖書観が日本のキリスト教を弱いゆがんだものにしてしまった。チャップマンが言うように、第二次世界大戦前、日本のキリスト教徒は国家神道がもつすべての問題に多いに悩みながら、教会はもちろん、キリスト教主義の学校においても、旧約聖書の知識の不足が偶像への妥協を容易にさせてしまった。偶像への安易な妥協は、神が最も憎まれることであり、そのようなことをなすものを神は罰しないではおかない方であるということも知らされずに、安易な妥協をしてしまったのである。旧約聖書を学ぶこと

をおろそかにしたつけが、このような形であらわれたのではないだろうか。

戦後のキリスト教

戦後、キリスト教はどう変化したのだろうか。確かに、皇国史観を強制されることから解放された。しかし、その亡霊はなお生きている。偏狭な民族主義は今でも生きている。梅原猛は日本を代表する哲学者、宗教学者の一人であるが、この人が中村元との新春対談「こころ：日本人を語る」(朝日1990年1月8日、16日)で「宗教いかだ論」という説を提唱した。いかだは川を渡れば用がなくなり、乗り捨てればよい。これは仏典に出てくる教えであるが、今一番すてられるべき「いかだ」は、一神教であると主張している。同氏の論によれば、一神教はこれまで人類の文明を発展させるのに非常に役立ったが、一神教は戦闘的であり、人間征服にパワーを発揮したが、今日の世界は、たくさんの宗教を持っている人たちが共存していかねばならない時代であるから不用である。それに対して多神教は、あっちの神もいいが、こっちの神もいいということになれば、戦闘意欲を喪失させる。だからこれからは一神教を捨てて、多神教に乗り換えるべきだと言う。これは全く乱暴な意見だという他はない。多神教の世界が平和であるという証拠を私たちは歴史のどこで見出すことができるのだろうか。このような論調が日本の大新聞の新年を飾る対談に掲載されることに大きな問題を感じ取るのは筆者だけだろうか。今年(1997年)も朝日新聞は1月6日-9日まで「梅原猛の世界」という題でコラムを掲載した。その中で梅原氏はキリスト教の世界観を否定し、輪廻による循環の世界観に立って日本教を打ち立てようとしていることを語っている。こういった論調が日本において次第に声高になっていくのを最近特に感じる。これは明治時代に唱えられた和魂洋才の平成版である。

他方、キリスト教会においては、聖書の靈感を否定する批評的研究は今も盛んである。歴史的批評的研究のすべてが悪いわけではない。しかし破壊的な批評学を受け入れた教会の教勢は現状が物語っている。渡辺善太が述べたように、聖書の信憑性を否定しておいて、どうして聖書から神のみことばを語るができるだろうか。それに対する反省が今起っている。

福音的な教会では、戦後聖書の靈感を信じる宣教師が大学来日した結果、

人々の目を再び旧約聖書に向けさせてくれた。TCUの前身のまた前身である日本クリスチャン・カレッジやTC TSの前身の日本基督神学校、さらに聖書神学舎など福音的なキリスト教の教職者の教育機関が相次いで設立された。共立女子聖書学院も戦後再建された。また前述した中央神学校の閉鎖の後、神戸に改革派神学校も設立された。その他多くの福音派の教派による神学校も設立された。こういった教職養成の機関が福音派の中に設立された意義は大きい。それは旧新約聖書66巻を誤りなき神のことばをして受け入れる立場に立っているからである。戦前から考えるとずっと多くの人たちが旧約聖書に親しみ、旧約聖書を読むようになった。また、旧約学を専門とする学者も、教師も多く与えられるようになった。しかし、教会において旧約聖書が説教のテキストとして通常用いられ、その知識と思想が信仰生活の中に、日本のクリスチャンの思考の中に健全に生かされているだろうか。たしかに旧新約聖書から忠実に説教をしている牧師や教会を幾つも見上げてはいる。しかし残念ながらその数は決して多くはない。私が知っているかぎり、教会では十分に旧約聖書から説教されていないし、また、旧約聖書が示している思想が十分に教えられていないようにも思う¹⁸⁾。

また、新約聖書からテキストをとって説教する場合でも、旧約聖書の思想とのつながりが十分に語られているだろうか。そのことが語るときに、神の救いの御計画の壮大さを聴衆に語るができるのである。旧約聖書の思想を正しく分かりやすく説き明かしたとき、新約聖書の福音はもっと躍動的に、感動をもって人々に伝えることができるはずである。

実際、キリスト教の重要な教理である唯一にして創造主なる神について（神論）、地の塵から造られ、神のかたちに似せて作られた人間について（人間論）、イエスの十字架の贖いについても（贖罪論）、神の義と愛の素晴らしさについても（神の属性）、また、世の終わりの概念についても（終末論）、神の裁き—終末的な裁きと同時に歴史を支配される神の裁き—についても（歴史観）、旧約聖書の思想を抜きにしては語るができない。そして何よりも偶像礼拝を憎まれる神、それを行う者を罰しないではおかない神について。

以前、私は日本福音主義神学会で「旧約聖書からの説教」という題でのシンポジウムで発題講演をしたことがある。当時（今でも）私は未熟な一牧師、一教師であったが、多くの牧師がこの問題で格闘しているのがよく理解できた。

私自身は結核療養所で旧約聖書を英文で読む機会が与えられ、そこで、今まで自分が教えられてきた皇国史観とは全く違った世界観に触れ、そして、新約聖書を読んだ時、始めてイエス・キリストの十字架の贖いの素晴らしさを知って、信仰を持つことができた。新約聖書だけではとても信仰を持つことはなかったと思う。勿論そこに聖霊の働きがあったことは確かであるが。

私は日本人が一度は教会の門をくぐり、洗礼を受けるけれども、いとも簡単に信仰を捨てて、この世の風習にそまってしまうのは、旧約聖書をよく読んで、その思想を習得していないからだと思っている（受洗者の数に較べて教会への定着率が低いのは他にも幾つか理由はあるが）。もしパウロが言うように神のいつくしみと同時にそのきびしさ（ローマ11：22）に触れているならば（それは旧約聖書に触れて始めて分かる思想）、そんなに簡単に信仰を捨てることはないと思うし、また、チャプマンが言うように、戦前、あれほど容易に政府の圧力の前に屈してしまうことはなかったのではないだろうか。そして、今このように容易に信仰を捨てるのであれば、再び同じような事態が生じた時、人々は再び同じ過ちを繰り返さないとは断言できないのではないか。

それだけではない。教会はもっともっと旧約聖書の思想を一般の日本人にも、分かりやすく教える努力をする必要があると思う。考えてみて欲しい。世界53億の人間のうち、キリスト教徒は17億6千万人、イスラム教徒は9億3千万人、ユダヤ教徒は1700万人。世界の人口の半分以上は、なんらかの意味で旧約聖書の思想の影響下にある。日本はこのような人たちを相手に貿易をし、仲良くつきあっていかなければならない。イスラムの心を知るためにも、ユダヤ人のマインドを知るためにも、そして、西欧の人たちの心を知るためにも。そして一神教の意義を知らせるためにも。

私は中東を何度か旅行し、イスラエルにも住んだ。そこで出会ったアラブの人たちの多くはイスラム教徒であった。彼らは自分たちの信仰のルーツがコーランだけでなく、旧約聖書にもあるということを自覚していた（彼らは現存の旧約聖書の權威は認めないが）。現在、イスラエルの旧約時代の重要な遺跡を守っているのはイスラム教徒である。

私は、昨年ジャカルタを訪問する機会を与えられた。私を方々案内してくれた車の運転手は、ある日本の大手の商社の現地法人の社長の乗用車の運転手であった。ある日、イスラムのモスクを見学することにした。その時、思いきっ

てこの運転手に旧約聖書にでてくる幾人かの人物の名前、アブラハム、イシュマエル、イサクのような名を挙げ、そして、イスラムとの関係を聞いてみた。また、エルサレムにある岩のドームとマホメットの関係も尋ねてみた。すると今までさざえのように寡黙で、不愛想であったこのインドネシア人の運転手は途端に雄弁となり、旧約聖書とイスラムの関係について語り始めた。その雄弁さと情熱と知識には、今までの寡黙と不愛想さを思うとただ驚きであった。一人の無学だと思っていたインドネシア人の運転手がこれだけ聖書とコーランについて学んでいるのだということに驚き、認識を新たにした。日本の一般のクリスチャンはこれだけ勉強しているだろうか。さらにこの運転手はこう私に語りかけた。今まで多くの日本からのお客を案内したけれども、あなたのようにイスラムを理解して話しかけてくれた人は始めてであると。殆どの日本人は経済のこと、観光のこと、食べ物のことしか考えていないと。

たしかに、現在日本人は東南アジアの国々に進出し、多くの工場を造り、経済を動かし、立派な家に住み、お抱え運転手を雇い、多くのメイドさんを使い、日本では考えられないような立派な生活をしているかもしれない。多くの日本人はその地にあつてある種の優越感を持っていると見える。しかし彼らが日本人を見る目は厳しいものがある。この運転手の言葉の中にもそれを感じた。彼らにとって日本人は単にエコノミック・アニマルなのかもしれない。日本人がどんなに豊かになっても、その精神的な思想が貧困であるならば、日本人は、経済のこと以外では決して尊敬されることはない。そして、もし、日本が経済の面で東南アジアや他の国々に優位を保つことができなくなったら、日本には何が残るのだろうか⁽⁹⁾。イスラム教は聖書の教えとはかけ離れている。しかし日本人の大多数が持つアニミスティックな世界観がそれよりも勝れているとはとても思えない。

聖書をもっと学ぼう。特に、旧約聖書を学ぶことに励もう。旧約聖書を学ぶことはあなたに新たななる角度から宇宙を見る目、世界を見る目、歴史を見る目をも養ってくる。そして何よりもイエス・キリストの十字架の贖いの豊かさをあなたに教え、聖書の中に神が示されている無尽蔵ともいえる宝を自分のものとするのできるのである。

もう一度言う。旧約聖書をもっともっと読もう。こういった時代にあつてこそ

私たちは、一神教に立った正しい世界観を打ち立てなければならないのである。

(本稿は1997年3月7日に行なわれた退任記念講演に多少手を加えたものである)

注

- (1) 黒田四郎他編『中央神学校の回想—日本プロテスタント史の一資料として—』(聖燈社, 1971年)。
- (2) 前掲書, 103-4頁。
- (3) 前掲書, 104頁。
- (4) G. E. ライト『歴史に働く神—告白的朗唱としての聖書神学—』新屋徳治訳(日本基督教団出版部, 1963), 13-15頁。Th. C. フリーゼンも旧約聖書が講壇で用いられなくなったのは世界的な傾向である。そしてそれは特にアジアの教会において顕著に見られることであると述べ、インドの例を挙げて次のように記す。「インドでは多くの人々はさらに進んで、新約だけは聖書として承認するが、旧約は古いインドの文学で替えようとしたのである。」Th. C. フリーゼン『旧約聖書神学概説』(日本基督教団出版局, 1972), 130頁。しかし、こういった状況は今日福音主義に立つ教会ではずいぶんと改善されていると聞く。
- (5) *The Midrash on Psalms*, (New Haven: Yale University Press, 1959), p. 201.
- (6) C. ヴィスロフ『説教の本質』(聖文社, 昭和45年), 358-9頁。
- (7) イレナウス『異端駁論』Ⅲ. c 3. Philip Schaff, *History of Christian Church* vol. II (Grand Rapids: Eerdmans, 1956), p. 484.
- (8) *Works of Martin Luther* I (Philadelphia: Holman Co., & Muhlenberg Press, 1915), p. 312.
- (9) ウイレム・J・コーイマン『ルターと聖書』(聖文舎, 昭和46年), p. 312.
- (10) この点については、以下の書をも参照せよ: D. L. Baker, *Two Testaments: One Bible* (Downers Groves, IL: Inter-versity Press, 1976), pp. 52-3; Emil Kraering, *The Old Testament since The Reformation* (London: Lutterworth Press, 1955), pp. 21-42; R. S. Wallance, *Calvin's Doctrine of the Word and Sacrament* (Edinburgh: 1953), chs. 3-4.
- (11) Kraering, *The Old Testament since The Reformation*, p. 21.
- (12) *Ibid.*, p. 14.
- (13) Baker, *Two Testaments: One Bible*, p. 56.
- (14) *Ibid.*
- (15) 「ボンフェッファー選集」VI『告白教会と世界教会』(新教出版社, 1986), 83頁。
- (16) 明治学院敗戦50周年事業委員会編『心に刻む—敗戦50年・明治学院の自己検証—』(1995年), 31頁。
- (17) 関庚培『韓国キリスト教会史』(新教出版社, 1981), 401頁。
- (18) この点については榊原康夫「あなたにとって旧約聖書とは何か?」『福音主義神学』

3 (1972年11月), 13-28頁参照。

- (19) キリスト教とイスラムの問題についてはここでは触れない。旧約聖書とイスラム, そしてキリスト教との問題については, 拙著『わかりやすい旧約聖書の思想と概説』上 (いのちのことば社, 1994年), 11-22頁参照。

[Abstract in English]

The Old Testament and the Japanese Church

M. Nishi

G. K. Chapman mentions in *Reminiscences of the Chuo shingakko* (1971) as follows: One of the reasons why the Japanese church has been weak is that it has not much used the Old Testament in the church. This is testified by the facts that they yielded to idols worship under the political power of the government during the last war, and also can be seen in the confessions of sins concerning their liability for the war, which was made by the Kyodan right after the war. They had not been aware that they had bowed the knee to Baal, that is, to the Shinto cults during the war.

The writer reviews the use of the Old Testament in the history of church, especially of the Japanese church since Meiji-era. The main reasons that the Japanese Christian has not used the Old Testament much are: 1) Nationalism as represented by the Imperial Rescript on Education, and 2) The results of influence of destructive criticism.

The situation has been much improved since the war. But distorted nationalism has still survive, and critical interpretations of the Bible are popular among non evangelical groups even now. The writer presumes that many Japanese churches should grow much stronger if the churches accept the Old Testament as the inspired revelation of God and learn from it the fundamental thoughts of the Bible, that is, the ideas of God, man and history etc.

〔日本語要約〕

旧約聖書と日本の教会

西 満

チャプマンは「中央神学校の回想」(1971)の中で次のように記す。日本の教会が旧約聖書を余り用いてこなかったことが信仰が弱い主な理由の一つである。特に軍国主義盛んな時代、教会が政府の圧力に屈して偶像崇拜の罪に陥ったこと、さらに戦後、教団がなした戦争責任告白に、国家神道の祭式にキリスト教徒が妥協した悪にふれていない事実がこれを証明している。

筆者は、二千年の歴史の中で教会が旧約聖書をどのように用いてきたかを概観し、明治以後の日本の教会が旧約聖書をあまり用いてこなかった主な理由について考える。それは1)教育勅語によって代表される国家主義。2)聖書批評学のもたらした破壊的影響などである。

戦後、このような状態は大いに改善された。しかし、ゆがめられた民族主義はなお生き残っており、聖書批評学も盛んである。しかし、日本の諸教会が66巻の聖書を真に靈感を受けた啓示の書として受け取り、それから基本的な聖書の思想、神観、人間観等を学び取るとき、教会はもっと強くなることができると考える。